

物流研究会

http://lse6.u.e.kaiyodai.ac.jp/Navi_Logi/index.html

1. 2012 年度秋季研究会

(1) 日時:平成 24 年 11 月 24 日(金) 13:00~15:50

(2)場所:長崎大学 文教地区キャンパス
第 4 講義室(2F)

(3) 講演内容
特別講演が 1 つ、一般講演が 2 つ行われた。

「長崎港を使ったシームレス国際物流」

中田 稔 (長崎県土木部港湾課)

長崎港の外貨貨物取扱量の現状をみると、国内のハブ&スポークの構造により地方港湾である長崎港の利用率は低迷している。そこで、日中間における長崎港の地理的・歴史的優位性を活かした旅客を組み合わせたフェリーによる高速船物流の実現を目指している。コンテナ船に比べ高速船は、デメリットとしてコストが高くなるが、メリットとしてトラックによる船舶への直接乗り込みのため、衝撃、早さの点で特にフェリーであれば、定期性が優先的に確保される。この意味では、高速船輸送は荷主の多様な輸送用途に柔軟に対応可能であり、主な輸送品である鮮魚等において有用である。

現在の日中間の高速船の就航状況をみると、SSE や上海下関フェリーなどの貨物専用に対し、オリエントフェリーや日中国際フェリーといった貨客の就航形態が存在するが、旅客定員は極めて少ない状況である。長崎港では数百名の旅客収入を見込むことにより、さらに料金を低減可能である。特に荷痛みが少ないため、高鮮度、高品質な貨物対象貨物であり、県内産の養殖マグロを中国に輸出するうえで、航空機輸送に替わる輸送モードとして高速船輸送に可能性がみられる。長崎港が目指すシームレス物流としてはシャーシ積み替えのための港湾荷役の課題によるリードタイム・コスト高に対応

するため、総合特区の申請を行っている現状などが報告された。

「中国の鉄鉱石輸入における CO2 排出量と物流コストの現状把握及び削減効果の検証」

咸 曉黎、黒川 久幸(東京海洋大学)

中国の鉄鉱石輸入現状の把握が不十分さにより、CO2 排出量と物流コストの削減効果が検討されていない。そのためオーストラリアから中国向けの鉄鉱石輸送においては大型化をすすめることによる CO2 削減効果の有効性について示す必要がある。本研究では、中国の鉄鉱石輸入における CO₂排出量と物流コストの現状把握、大型化と連携港湾の活用による削減効果の検証を行なった。特に、青島港の大型化と 20 の連携港湾の活用の 2 点を行った場合の物流コストの削減と CO2 排出量削減の効果を対象とした積出港の輸出量である約 15757 万トン(オーストラリアから中国へ全体の輸出量の 71%)などの基礎データを基に、検討している。

講演では、大型化と連携港湾の比較(鉄鉱石専用船)について、①連携を行った方が大型化のみを行う場合よりも物流コスト・CO2 排出量の削減に効果がある、②大型化と連携港湾の比較(バルクキャリア)物流コストを削減するために、大型化のみの方が削減効果が大きく得られ、CO2 排出量を削減するために、連携を行った方が削減効果は大きく得られる、といった鉄鉱石とバルクキャリアについての検討が行われた。

「港背後地の空コンテナ回送における折りたたみコンテナ導入効果の検討」

新谷浩一(大島商船高等専門学校)、今井昭夫(神戸大学)

空コンテナの回送は、①コンテナの配置、②

トレーラの運用、③上記①②の組み合わせが考えられる。今回の検討は③である。想定するトレーラの運用には2種類あり、①荷主のコンテナ間の融通が可、②融通禁止である。通常は②であるため、②で整数計画法により本問題を検討し、特に、コンテナ折り畳みの費用が増大した場合、解にどのように影響を与えるのかを検討したものである。

具体的には、背後地でのトレーラによる空コンテナの集配送に注目し、折りたたみコンテナの導入によるトレーラの使用台数と走行距離の削減における有用性を、数理計画モデルを用いて検討した。講演では、折りたたみコンテナの導入は一般のコンテナよりも、空コンテナの回送の効率化に対して、一定程度の効果があることが示された。

(4) 研究会総会 15:15~15:35

- ・次期会長に岡山正人先生（広島商船高専）が決議された。
- ・運営委員については、新規会員の追加を待って、現在の運営委員会メンバーでの継続が決議された。
- ・2013年秋より、各メンバーの現在の研究内容・手法の取り組み方法の発表について意見交

換することで調整することが決まった。

2. 2012年度秋季運営委員会

(1) 日時：平成24年11月24日(金) 12:00~12:55

(2) 場所：長崎大学 文教地区キャンパス
第4講義室(2F)

(3) 議題

- ・25年度春季研究会のプログラムについては見学会等を含めた研究会のスタイルで検討を進めることとなった。
- ・他の研究会とのコラボ=>協賛の可能性を検討しながら物流研究会がメンバーの研究を紹介する機会としてはどうかという案が出された。
- ・現在当日の参加者が固定化し、いままで全員集まったことが久しくなく意見を集めることが難しくなっているため、OBやすでに業績を残されてきた先生方の講演（講習会）を開催し、やり残した研究課題とその経緯についての聴取する場とする案が出された。

(幹事:土井義夫)